

<h1>互生共環</h1>	<p>No.59 2026.02.04</p>	<p>編集発行人 〒189-0013 東京都東村山市栄町2-23-4-401 東條栄喜 E-address : etojyo@gmail.com (2025年末より更新)</p>
---------------	-----------------------------	---

## 目 次

### 巻頭言 四半世紀(2001-2025)の日本社会を振り返る - 2 -

- (1) 新保守ポピュリズムが跋扈した21世紀25年間
- (2) 日本の科学技術力と農業生産力の著しい衰退
- (3) 今後四半世紀(2026-2050)の重要課題と展望

### 通横逆の気化形化論と進化契機性 - 3 -

——生物転生と生物進化の狭間——

- § 1 統・禽獣巻の気化形化論（中期）
- § 2 法世物語巻の気化形化論（晩期）
- § 3 人類進化的思考の契機内包
- § 4 定常観と発展観の内的矛盾
- § 5 王船山の矛盾観と自然史観
- 結語 昌益の形化論は進化契機性の近世思想

### 現代中医学系の黄帝内経脾胃病研究 - 11 -

まえがき —昌益の胃脾無病論との対比から—

- (1) 中医学・補土学派は“脾胃病”を認める
- (2) 王道坤主編『新脾胃論』（2008）の概要
- (3) 韓金荣他編『《黄帝内経》脾胃学研究』（2021）の概要
- (4) 郝軍<sup>かく</sup>著『内経脾胃学術思想的臨床探析』（2012）の概要
- (5) 現代中医学の新脾胃論と昌益胃脾論の落差

### 熊・猪など野獣の市部徘徊という事態 - 14 -

#### 書材採録

- ① 徳永光俊著『日本農史研究 上下』（2025；農文協） - 15 -
- ② 安岡健一著『戦後史1945-2025 敗戦からコロナ後まで』（2025；中公新書） - 17 -

### 編集後記 - 18 -

## 〈巻頭言〉 四半世紀(2001-2025)の日本社会を振り返る

21世紀に入ってから、早くも25年＝四半世紀の歳月が経過した。この25年間の出来事を概括して今後の第2 四半世紀(2026-2050)に役立てる事は重要な意義があると思われる。

### (1) 新保守ポピュリズムが跋扈した21世紀25年間

政治と社会思想の面では、この時期に新保守主義のポピュリズムがまるで新世紀に見合った改革思想であるかの如く跋扈したことは否めない。国立大学の行政法人化(2004)、郵政民営化(2005)、教育基本法の全面改定(2006)、日本の総人口が初めて減少に転じた事(2009)、東日本大震災・福島原発事故(2011)、集団自衛権行使の閣議決定(2014)、公職選挙法改定・選挙権の18歳引上げ(2015公布;2016施行)、天皇が交代、元号が平成から令和へ(2019)、新型コロナウイルス禍(2020-2023)、労働者協同組合法の成立(2020成立; 2022施行)、安倍首相が銃撃で死亡(2022)、能登半島大震災(2024)、令和の米騒動(2025)といった事案が続いた。政治的には新保守主義の立場からの諸制度改変があり、大災害に関しては二度に亘る大震災で、日本列島が大地動乱時代に入っている事を明在化した。

新保守主義に対する労働者の側からの対応は受け身になりがちで、退潮の続いた四半世紀だった事は否めない。この対応の弱さが若者の“就職氷河期”を招き、不安定な雇用情勢と貧富格差の拡大へと拡がって現在に到っていると言えるのではないか。

### (2) 日本の科学技術力と農業生産力の著しい衰退

この25年間に日本社会には極めて深刻な階級格差が拡大し(＝中間層の分解と再編)、国家としては斜陽国家に転落した(＝GDPが世界2位から4位に転落、2026年内には5位に；人口減少の常態化など)。とりわけ、科学技術力の衰退と農業生産力の低下が著しい。前者は新型コロナウイルス禍の際のワクチンが総て外国からの輸入によって賄われた事に象徴されよう。後者は食料の自給率が38%にまで低落したうえに、農業従事者の高齢化が一段と深刻化している通りである。

天然資源に乏しく国土が狭いわが国では、科学技術力と食料生産力が常に高い水準を保持されなければ、1億2000万人の人々が安全・安心の生活を送る事が困難になる。この二つの要件は相俟って不可欠で、どちらか一方が低落しただけでも、国民生活に重大な支障を来す。先進諸国の中で、フランスは両者のバランスが比較的良く取れていると云えよう。ドイツも食料自給率は70%台を保っているの、日本の38%が如何に低劣かは明白である。――それは20世紀後半からの自民党政権の減反政策がもたらした結果である。そして21世紀に入って、安倍・菅政権の下で科学技術予算の漸次縮小・学術研究者の「雇い止め」＝使い捨て政策の断行などで科学技術力も著しく低下した。

### (3) 今後四半世紀(2026-2050)の重要課題と展望

従って、今後の四半世紀はこれら二つの基本課題の回復が必須の中長期的課題だと云えよう。加えて、石橋克彦・鎌田浩毅教授などが強調する通り「今世紀の日本列島は大地動乱時代に突入しているので防災・減災の備えが個人レベルから国家レベルまで必要」との大課題もある。

SNSの発展した現在ではテレワークも普及したことで、リニア新幹線などはもう不要なのではないか。こんな所に予算とエネルギーを注ぎ込むよりも、防災・減災の体制整備を本格化するほうが遙かにましだと思われる。また2020年12月には国会で全会派の一致により労働者協同組合法が成立、2022年度から施行された。労働者が自主的主体的に〈必要から始める仕事起こし〉の法的整備が整ったので、今後の四半世紀に明るい展望も拓けていけるのではないか。

# 通横逆の気化形化論と進化契機性

## ——生物転生と生物進化の狭間——

本稿では昌益の通横逆論による生物区分・転生論のうち、動物（鳥獣虫魚）の中でも禽獣と人間の転生の観点に関心を集中し、生物進化・人類進化への契機となり得る思考について論じたい。初期の昌益は刊本『自然真営道』において、概論的に生物の発生・棲息について棲息域ごとに多様な「生生の妙序」を持つと論じている。

「万物を中土に生ずるに、自り妙序有り。是れ其の妙序は、人家に六畜を生じ、人里に鳥・獣・虫・草・木を生じ、原野に鳥・獣・虫・草・木を生じ、山沢に鳥・獣・虫・草・木を生じ、河湖海に魚・虫・草・木・獣・鳥を生じ、皆其の生処異なり。（中略）故に万物、所所・生生の妙序を知らざる則は、悉く殺人の大災と為りて、助功有るべからず。」（刊・巻二）

こうした観点は中期以後、より具体的に展開されていった。以下では中期と晩期の論述から、鳥獣虫魚のうち禽獣を中心に採り上げて見たい。

### § 1 統・禽獣巻の気化形化論（中期）

（１）昌益は中期の稿本『統道真伝・禽獣巻』で、地球上の生物生成に関して、鳥類を手始めにして二つの段階を設定して大まかに論じている。

「夫れ自然が鳥類と成るに<sup>ついで</sup>序有り。通・横・逆に回りて妙用を尽す。其の第一の通気は転定と成り、第一の横気は中土と成り、第一の逆気は五穀・木果と成る。是れ通・横・逆一極して、而して逆穀中より又通・横・逆の進退を以て回る。其の通気の進退は男女の人と成り、其の横気の進退は鳥・獣・虫・魚と成り、其の逆気の進退は雑諸の草類と成るなり。故に人は転定に通じて即ち小転定なり。」（統・禽獣巻；鳥類の図解論）

ここでは転定－中央土－穀果の第一段階と、穀物からの逆発としての人間－動物－植物の第二段階とで生物界全般が生成されると捉えている。

（２）動物（鳥獣虫魚）については、昌益は「五生」＝胎生・卵生・湿生・燥生（気生）・形生（形易）の形態で発生するとしている。貝原益軒の『大和本草』では胎生・卵生・湿生・化生の「四生」論を採っていた。寺尾氏の禽獣巻「解説」によれば、仏説でも『俱舍論』などで同様の「四生」が論じられているとのこと。これらを批判する意図を込めて、昌益は「五生」を主張したようである。

「人・万物に、胎・卵・湿・燥・形易の五生の外、之れ有ること無し。又、五生の内四生にも非ず。故に自然の為る所なり。」（統・禽獣巻；胎・卵・湿・燥・形、五生自然の論）

中期昌益は進退五行論を主張していたので、生物発生についても「五生」を提唱したとみられる。しかし晩期には進退四行論に移行したので、これに伴って五種を四種＝「四生」論に改めた気配は無い。（ただし、法世の人が不耕食の生き方をすれば「死しては乃ち形化の四類に落つるなり。」と論じた箇所もある－「法世物語巻・諸獣会合して法世を論ず」がこの場合、特段「四」類を強調しているわけではない。）

形易（形生）は他の「四生」と違って発生ではなく、幼虫から成虫への形態変化・変態の類いだから、「五」に拘った中期昌益の立論には不整合性も認めらる。

（３）昌益の中期「五生」論の特徴は、四点ほどある。

第一に「五生」の区分け基準に、眼による区別をしている事が挙げられる。胎生生物の眼は上から

下に閉じ、卵生生物の瞼は下から上に閉じ、湿生生物には瞼が無く、気生生物は眼窩無しで目玉が突出、形生生物は眼がなく小黒点があるという珍論になっている。

第二に食生に関しては、大が小を食う「互生互食」が一般論だが、家畜は野生動物と区別され「互食」をしない穀食動物であるうえに、人家に生まれ棲み人用を果たし、「人気の余精」で生まれるとされる。（但し昌益の「六畜」とは馬・牛・犬・鼠・猫・雞で、馬・牛以外は通例と異なるが。）この点は後述する進化への契機性の一認識と言って良いのではないか。

第三に生息域に関しては鳥・獸・虫・魚それぞれに細かい区分をしている。例えば獸の場合は「人里の獸」「原野の獸」「山の獸」「河川の獸」「海獸」と区分けている。貝原益軒の『大和本草』での生物区分よりも具体的になっていると云えよう。（昌益の論述は『大和本草』よりも中国・李時珍の『本草綱目』の批判に集中しているが。）

第四に進退五行論との関係では、獸類はすべて「横退偏」の気で生まれるが、各々の獸は五行のどの気が主気・伏気になるか、その組み合わせで違いが出るものと立論している。例えば熊は水・金が表に出て火気は伏し、鹿は火・金が表に出て水・木気は伏在、といった説明がなされる。（晩期にはこうした五行論のこじつけの配当論がみられなくなる。）

（４）寺尾五郎氏は総括的に、昌益の家畜論の有意性と限界について次のように論じている。

「野生動物と家畜とははっきりと分けるという観点は、なかなか意味のあることである。植物における栽培植物、動物における家畜は、人間の自然改造の大きな成果であって、そのことに強く注目することは、自然科学者の<sup>まなこ</sup>眼というよりは、「直耕者」の眼にしてよくなしうところであり、大いに昌益らしい。（中略）ところがここでも昌益の旧式な運氣論的な思考が災いして、その家畜論は十分に発展することができなかった。（中略）野生のものが人間に飼育されて次第に変化してきたとみることができず、そもそもの発生から別だとしてしまった。」（統・禽獸卷 解説）  
直耕論により家畜と野獸を区別した点は優れた指摘だが、他方で運氣論が生物進化論的思考に進むのを妨げている面との両面を指摘しているわけである。

## § 2 法世物語巻の気化形化論（晩期）

（１）晩期昌益の稿本『法世物語巻』では、周知のように人間の階級社会を鳥獸虫魚に投影・仮託して面白可笑しく論じている。鳥獸虫魚の各類ごとについて、それぞれ王・公卿大夫・將軍・諸侯・家臣・足輕などを配当し、人間社会の歴史が「聖人」の出現により階級社会になった事は「禽獸の世」と何ら変わらないと極言する。それは中期の著作『統・紂聖失』巻でも既に論じられていた。

「聖人出でて王と為り、<sup>かみ</sup>上に立ち、上を以て大と為し、衆人を以て下と為す。之れより大小の<sup>ついで</sup>序ちて（中略）大は主として小の行業を食い、又次の大は其の次の小の勤業を食い、凡て是の如きよと為る。是れ乃ち禽獸の世なり。（中略）今の世、全く是れなり。」（統・紂聖失）  
この観点は『法世物語巻』でも、まずは継続して同様に主張されている。

「法世の人、其の形は人にして其の心は横偏気、其の行いは不耕にして転道を盗み貪り食う、故に形は通気の人にして心と行いは横気の獸なり。」（法世物語巻・諸獸会合して法世を論ず）  
『法世物語巻』では従って、鳥獸虫魚の気化形化論については基本的に「統・禽獸卷」と同じが、人間社会の批判を論じる事が主題になっている。

（２）その帰結としての特徴的論展として第一に、野獸と家畜の区別、野獸の生息地ごとの区分（人里の獸・原野の獸・山獸・河川の獸・海獸）は取り払われた。

家畜については、昌益の言う「六畜」のうち馬・牛・犬・鼠・猫の各々は野獸の一部として、雞は

鳥類の一部として扱われている。

「獣世の序、独は帝王なり、象は公卿なり、獅獅は將軍為なり、猿は家老・用人なり、熊は諸役人なり、狼は諸士なり、馬は足輕なり、鹿・猪・○・狐・狸・貉・○・猶・兎・牛・狗・猫・鼠・鼬等、諸の小獣は工・商・僧・巫・山伏・医者・乞食等なり。〈皆、大は小を食う序は具わりなり。〉」

(同前)

ここでは馬が足輕相当、牛・狗・猫・鼠は工・商など相当と区分されている。雞はこの引例には無いが、「諸鳥会合して法世を論ず」の項で「鳥世の君子・勇士」と鳥類の中でも上席の鳥として扱われている。

(3) 第二の特徴的論展として、私法世の本格化に伴い、下層の人間と同様に家畜類も一層過酷に責め使われるようになったと論じている。例えば馬については、

「吾れ等は、人家の燔木の精気に生まれ、転真の世には、人のために○を荷え、田畑を和らげ、真人直耕の助けを為し、転与の儘に働き、人に飼われて性を遂ぐ。(中略)聖釈以来は(中略)吾等に鉄の轡を口に繋け、或いは肛門に南蛮を指し込み、爪を切り、焼き金を当て、乗り責め、意の如くに食為せず。其の苦しみ堪え難し。」

(同前)

そして獣世と人間法世を比較すれば、獣世の方がまだずっとましだとまで極論している。

「凡て無量の苦しみは、法世の人に有れども、獣世には是れ無し。(中略)獣世には凶年・餓死の患い無く、収納を責められて患い、借金催らるる患い無く、貧乏にして家を売り厥け落ちする者無し。(中略)獣世は人の法世には杳かに勝れて安平なり。」

(同前)

これは本節の(1)での引例(=中期昌益)で、人の法世は禽獣の世と何ら変わらないと論じた事を更に超えて、獣世の方がまだましだと言っているのです、中期よりも晩期の方が一層激しい論展になったと言えよう。

(4) 第三の特徴的論展として、それぞれの獣の発生=気化に関しては生態・性格などの説明に、中期の統・禽獣巻に見られたような、木火土金水の組み合わせでこじつけの説明をする事が無くなり、生息地ごとの余精で生まれるとする記述が多くなった。

馬は「人家の燔木の精気」に生まれ、牛は「人家用水の精気」に生まれ、猫は「人家、炉灰の精気」に生まれ、狗は「人家の鍋釜鉄の精気」に生まれ、鼠は「人家の煙気の精」に生まれ、蝙蝠は「鼠の老形化」、狸は「岳穴の火気凝りて」生まれ、貉は「狸の老化」であり、狐は「野火の精」に生まれ、兎は「晴月の精」に生まれ、獺は「猫の形化」、豚は「狗の余気」に生まれ、猪は「山陰中の退偏気」に生まれ、鹿は「山陰の退横偏に、木気主にして」生まれ、猪も「山陰中の退偏気」に生まれ・・・等々と論じられている。

これらの事例は『統・禽獣巻』の記述とほぼ同じが、全くの引き写しというわけでもない。一例を挙げれば、家畜と野獣の区分が取り払われた結果として、

猫 → 獺 → 河童  
(形化) (形化)

といった、形化の継続として三種の動物が関連づけられた例もある。河童は実在動物とされている。

(5) こうして晩期の『法世物語巻』においても、昌益の禽獣論(広くは動物論全般)は通横逆・進退の気行論の枠組みの下で、近世的制約・限界を如実に感じさせる内容だが、それでも人間社会と動物世界の対比で、私法世の不条理を鋭く批判している。

明治・大正の文豪、夏目漱石が「我輩は猫である」の作品で、猫に仮託して近代人間社会を風刺し

た発想も、こうした昌益の論調と一面において通ずる所があると云えよう。

### § 3 人類進化的思考の契機内包

これまでの記述も踏まえて、昌益の一連の著作において、人間社会と動物世界の対比から、どのような部分に人類進化的思考の契機が散見されるかを抽出的に示しておきたい。

#### (1) 人間の直立動作と自由獲得の主張

「人は転定に通じて直立なり。」 (刊・巻二)

「鳥・獸・虫・魚は横気に生ずる故に、飛べども定<sup>ち</sup>のみを視<sup>み</sup>、走れども、這<sup>は</sup>えども遊<sup>およ</sup>げども定のみを視て、直立して転を視ること能わず。人は仰ぎて転を視、俯して定を視る自由<sup>え</sup>を得、通ぜざること無きは、是れ中真なり。」 (統・人倫巻)

直立して歩行・生活できることで視界を三次元的に拡げて生物的自由を獲得していると、昌益は認識している。しかし進化の結果として前足は手として機能することで、新たな活動能力が可能になり、道具の発明や耕作活動へと進む事までは論じていない。横回禽獸と直立人間の能力差を、昌益はまだ自然史的・生物進化と捉えてはいないが、それでも其の契機性を内在していると云えよう。

一方で昌益は、法世の人が直耕の本道から外れた生き方をすれば、動物以下にもなるとする、退化論をも主張する。

「獸世には同類を食いども、同類を生<sup>い</sup>け捕<sup>ど</sup>り、梔<sup>おり</sup>に入れ、畜<sup>やしな</sup>え置くこと無し。(中略)横偏気の妄惑なる聖人、是れ弁えざる横偏心に生<sup>うみつき</sup>得、転真・直耕・通気<sup>うみつき</sup>の人の世を横偏の獸世と同じき法世と為<sup>す</sup>るは、此の故なり。」 (法世物語巻・諸獸会合して法世を論ず)

#### (2) 主体的生産労働による生命・世代の持続の指摘

人は本来的には、自らの生産労働で食物を作り生命を維持し繋ぎ、世代交代を果たすという点で、動物との決定的違いを昌益は強調する。動物世界、特に禽獸の世界では大が小を食い、自らが食物を生産して得ようとしなが、人と禽獸との此の違いはまだ進化論的には主張されていない。しかし進化的思考の契機性を内在していると云えるであろう。

「人は米を耕し米を食い、吾れ彼れ与に耕し、子・孫、子・孫と是の如くして無終なり。」

(統・万国巻)

これも逆に言えば、直耕＝自耕による食料生産と生命維持の本道から外れて不耕貪食・食物略奪に走れば、それは人間の本来の生き方から野獸と同じ生態への退化・転落だという事になる。それは倫理的に主張されているばかりでなく、進化論的契機も内包していると云えよう。

#### (3) 家炉、広くは炉用の有意性の認識

昌益は食料の生産と共に、炉の使用(狭義には家炉、広くは工炉も含めて)を人間生活の必須の要件と認識している。炉用は貴賤貧富に関係なく均しく食生の十全化に不可欠であり、更に生活用具の製作にも不可欠であり、拡張的に言えば、広く物質形態の転換に不可欠な事を明確に認識している。そして炉をそのように機能させるには燃料＝薪木と容器＝鍋などもまた必要になり、円滑な人間生活のためには食料生産と並んで安定的に入手が必要なことを理解している。ありきたりの事を言うようでも、これは単に火の使用という人類史の原初的認識を遙かに超えた、食料－炉用の統合認識といえよう。

「人家有りと<sup>へつつい</sup>も<sup>トキ</sup>炉・竈<sup>ナマモノ</sup>無<sup>ヤブ</sup>き<sup>トキ</sup>則<sup>トキ</sup>は、人・物生続すること能わず。炉・竈、食用を為す故に、人の生常中なり。(中略)人常に生物のみを食う則は、先転定・後転定、和調せずして府蔵傷れて死す

。故に、人生常中は唯炉に在り。」

(稿・和訓神語論)

「家屋の美疎は上下・富貴貧賤・賢不肖と品品に分れて同じからずと雖も、毎家の日用の炉中の五行の煮熟して食う道に於て全く二別無し。」

(統・万国巻)

生物一般の棲み処に関しては人間も動物も相応に持っていると言えるが、家炉・炉用は人間の生存に必須特有の造作である事を、昌益は改めて見直している。禽獣から人類進化への生物進化史的な認識と論及に及んでいるわけではないが、通横逆の運氣論で人間―動物―植物の連環を論じ、人間と動物の能力差も論じているので、これも進化思想への契機的な役割を持っていると言えるのではないか。

以上の三点は、人間生活だけを動物世界から切り離して見た場合には、自明の事柄で有ろう。しかし通横逆の運氣論で生物世界と人間を連環付け、それらの機能差を意識的に見直すことで、生物進化への契機的思考を持ち始める役割を持っていると捉えうるのではないか。

#### § 4 定常観と発展観の狭間

前節で述べた、禽獣から人類への進化的思考の内在契機はしかし、昌益の基本的な哲学思想との間に矛盾を抱えている。本節ではこの点について簡潔に論じておこうと思う。

##### (1) 無始無終自然観と巨視的人類史観の矛盾

昌益は自然界・動物界を「無始無終」の定常的な「生生循環」の世界として把握している。

四行の循環と通横逆の循環はいずれも、決まった順序(木→火→金→水→木・・・; 通→横→逆→通・・・)と円環的に運行されるが故に、定常的に無窮に繰り返されると措定されている。

一方で人間社会の歴史推移・未来展望は、中期までは

自然世→私法世→自然世

と復初的に主張されていたものの、晩期になって

自然世→私法世→活真世

と呼び名を改められた。未来に関しての自然世から活真世への改変は単に名称を変えただけではなく、勤働者の社会的自覚の上に築かれるべき高度な協働社会と目標視された故の改称であった。従って活真世はもはや原初の自然世への回帰ではなく、私法世の根本矛盾の解決として、巨視的发展性を持った高次の自然世と云えよう。そうすると晩期に到って昌益の思想では、定常的・円環的な自然時間観と発展的人類史時間観の間に、一種の内的矛盾が生まれてきた事になると見なされる。——この点を、昌益がどこまで自覚的に認識しえたかは、不明だが。

##### (2) 自然循環社会と循環拡張志向の矛盾

晩期の昌益一門の過渡期社会論(=「私法盗乱の世に在りながら、自然活真の世に契う論」)では、私法世の変革の一環として、人々の住む流域生業圏=山里・平里・海里的それぞれについて、計画的に耕作・育林・特産物の生産と交易が企図されている。この、自然循環に即した限りでの環境改変の構想は、中期から晩期にかけて逐次具体化・詳論されている。(この点については筆者はこれまでの自著『安藤昌益の「自然正世」論』(1996)・『互性循環世界像の成立』(2011)・『安藤昌益の思想展開』(2022)で一貫して強調してきたので、その内容についてはここで詳論しない。)

その結果として、昌益が鉱山開発公害などを糾弾していても、それは単純に“無為自然に帰れ”などと復古的に叫んでいるのではなく、自然循環を損なわずに拡張された再生循環社会を構想した内容と云える。従ってここにも、自然環境と今後の望ましい社会計画との間に、定常的自然観と新たな人為自然発展観の内的矛盾が生まれていると言えよう。——この点も、昌益がどこまで自覚し得たかは

不明だが、決して悪い矛盾とは云えない。

なお、人が絶えて耕作も無くなれば、穀種も山野に退生すると昌益は説く。

「穀は人を去らず、人は穀を離れず。人の耕を為する則は、山野に穀を生ぜざる所以なり。若し世界の人の絶ゆるなれば、穀は山野に生じ、穀精の満つるときは人と成る。故に人と成りて有る中は山野に於て穀を生ぜざるなり。」  
(統・万国巻)

### (3) 生物生態循環と穀精—人類発生史の指定

昌益は人間—動物—植物の生物連環を運氣論で強調する中で、穀種と人間を発生史的にも論じた箇所がある。

「人初めて見わるるに、裸にして養いを為る者無し。(中略)未だ見われざる前に穀麻生じて有る則ば、乃ち穀を得、之れを食す。(中略)転定に具うる穀精の人則ば自然の妙徳なる故、穀を食し麻を織るの事業之れを知ること真の自然なり。(中略)米種の、水泥柔土に盛なることを之れ知る。(中略)衆穀の種、原野山叢中の間間に於て生育し実りて之れ有り。(中略)食うて人の精氣と為し自然転定の妙用を見わすこと人また之れを知る。(中略)先ず穀種を為し後に人と為る、皆自然の為る所な則、最初の人之れを知らざることまた之れ有るべけんや。」  
(統・人倫巻)

このように、人類の発生は禽獣からの進化でなく野生の穀種の精から発生し、その後は人間が耕作・麻織・家作・・・へと進んだと昌益は理解している。定常的な生物生態循環と併せて、人類発生史的な観点が生まれているわけである。

そしてひとたび人類史が始まると、人→穀→人→穀・・・というサブサイクルも指定する：

「人は通気に生ずる故に、常に通心にして、欲悪・私願の横たわらざるなれば、死して穀に生じて人なり。又進みて死し、退きて生じて人は人なり。」  
(統・万国巻)

また「人余六畜」＝穀食性の人家動物が形成され動物界の一部に人為的变化を来とし、自然素材の能毒の認識も生まれ薬用植物の採取、樹木用材など、総じて人間直耕の拡大・進展が元々の生物生態循環に何ほどかの人為的改変をもたらしていることを、昌益は理解している。

以上、本節では三点にわたって昌益の理論が、定常的自然観と発展的社会観の間で内的矛盾を抱えながら、生物進化・人類進化への契機性を持って組み立てられている事を見てきた。

上記小項目の(1)は円環的時間観と歴史的時間観の矛盾、

(2)は自然循環社会と拡張循環社会の矛盾、

(3)は自然生態循環と人為的生態系の矛盾、

として区分できる。しかし、これらの内的矛盾を持っている事は昌益の自然・社会思想の内在欠陥と言うよりは発展性の内在契機だと、筆者は前向きに評価している。

それでは、東アジア文化圏の近世までの歴史において、こうした内在矛盾を克服した自然史観・人類史観・社会発展観を持ち得た人物は果たして輩出した事例があるのか？と問い直す人も出てくるであろう。筆者は其の端的な事例として、中国・明末清初思想家、王船山(＝王夫之)の哲学思想・自然思想・社会思想を比較研究した経緯があるので、その概略を次節で取り上げたい。

## § 5 王船山の自然史観と人類史観

王船山(＝王夫之；1619-1692)は中国の明末清初の思想家である。安藤昌益よりも一世紀前の人物だが、両者の思想・理論を比較する事には重要な意義が有ると思われるので、ここでは三点に絞って採り上げ、安藤昌益の思想と比較しながら簡潔に論じておきたい。



### （１）陰陽相倚の自然史観

王船山は伝統的な陰陽矛盾思想を自己流に大きく変革した。その矛盾観の大きな特徴の一つとして「陰陽相倚」の不均衡矛盾の観点が挙げられる。自然界も人間社会も、この不均衡矛盾を内在しているが故に、絶えず遷移・変化の過程にあると捉える。この基本観点は現代中国では、明代中葉の唯気論思想家・王廷相（1474－1544）を受け継ぎ、更に展開した内容と理解されている。

「有陰にして無陽無く、有陽にして無陰無く、両は相倚して離れざる也。（中略）多寡は之れ齊しからざると雖も、必ず交待を以て成る也。」（周易内伝・卷五）

自然界・人間社会のあらゆる事物が陰陽の相互内包・相互共存の中で相倚＝不均衡で相対し運動していくので、事態は「日新生化」の遷移の過程にあると主張される。

「天地の徳は不易、而して天地の化は日新、今日の風雷は昨日の風雷に非ず、是れを以て今日の日月、昨日の日月に非ざるを知る。」（思問録・外篇）

これは安藤昌益の「無始無終」の円環的・定常的な生生循環自然観とは著しく異なり、自然界の時間発展、人類史の歴史的進歩を認める基本的根底思考といってよい。安藤昌益の場合は、自然界は転気・定気とも四行八気の均衡のとれた状態が本来的正常態であり、四行八気間に不均衡が生じれば、それは天地であれ人体であれ、不正常の病態だと論じられている。（ただし人間社会の歴史に関しては、前節までに指摘したように、晩期には自然世－私法世－活真世の巨視的發展観に達し、自然時間と歴史時間の違いが顕在化した。）

### （２）生物進化・人類史観

船山は生物から人間社会への進化に関して、一般論的に材・質・文の三概念で生物・野人・文明人という区分けをし、文明人の頂点に聖人を位置づけている。

「草木禽獣の有材、足るを以て質となすを疑い、未だ足らざるを以て質となすは、天に資して自ら用いること能わざるなり。（中略）野人の有質、また其の文を疑い、未だ足らざるを以て文をなすは、用に安んじて機に足らざる也。故に聖人は其の用を善く成し、其の機に因らず。生は天也、質は人也。文は聖者の所以也。」（詩広伝・卷三）

更に中国での人類史については、次の引例のように遡古的に、軒猿（＝黄帝）以前は夷狄（＝差別観の入った中国周辺の未開異民族）同然、太昊（＝伏羲）以前は禽獣同然だったと推測し、禽獣から無文の直立獣－夷狄を経て古代王朝に到ったとする。

「吾れの知る所は、中国の天下、軒猿以前は其は猶夷狄のごとしか。太昊<sup>こう</sup>以上、其は猶禽獣のごときか。禽獣は其の質を全うすること能わず、夷狄は其の文を略すこと能わず。文の不略、漸く無文に至る。則ち前に与識無く、後に与伝無く、是れ恒無きに非ず、取舍無据、謂わば飢える則は<sup>こうこう</sup>响响、飽く則は余りを棄てるは、亦植立の獣なり。」（思問録・外篇）

これに対して昌益の場合は、穀精からの人の発生→原始共耕社会の形成→狡知不耕の支配者（＝聖人）の出現（＝階級社会の始まり）という順序での発生史的人類史観である。聖人に対する理解・評価が相反している。

### （３）社会進化・革命論

『易伝』にある「道器」論に関して、船山は独自の道器論を提起し、器＝具体的事物と道＝原理・法則の関係に関して、両者は不可分一体、道は器中にあり道から器が派生するのではなく、「治器」は可能だが「治道」は不可能だと主張した。

「統べて此の一物、形而上なれば之れを道と謂い、形而下なれば之れを器と謂い、一陰陽の和して

成らざること無ければ尽器則道は其の中に在り。」 (思問録・内篇)

「古の聖人、治器を能くして治道を能くせず。治器は則ち之れを道と謂い、道を得れば之れを徳と謂い、器成れば之れを行と謂い、器用の広なれば之れを変通と謂い、器効の著しきは之れを事業と謂う。」 (周易外伝・系辞上傳)

こうして旧来の道器批判をしたうえで、船山は社会の器と道の相互作用により社会発展が進むと理解した。社会秩序との関係では治と乱、合と離の交錯・反復で社会発展が進むという。

「天下の勢、一離一合、一治一乱而已・・・一合して一離、一治して一乱、此に以て天道を知るべきなり。此の如く以て人知を知るべきなり。」 (読通鑑賞論・卷十六)

「治乱循環、一陰陽動静の機なり。」 (思問録・外篇)

このように、治乱の循環を繰り返しながら、社会は発展していくという史観である。

これに対して昌益の歴史観は、私法世での治乱の繰り返しは悪循環であり、治と乱の双方を根絶して初めて平和で平等な社会が可能になるという展望である。図式的に言えば、

王船山は治乱循環を肯定した段階的な社会発展論、

安藤昌益は治乱の双方を否定した共同体展望史観、

と対比できよう。

### 結 語 ——昌益の形化論は進化契機性の近世思想

- (1) 昌益の気化形化論は、通横逆の自然運氣論で人間・動物・植物を連環付け、素朴な生態循環を基礎に構築されている。三者をそれぞれ別個の存在として扱わずに生態循環の環節として把握した点が、他の本草学者などとの違いであり、有意性を持っている。
- (2) 更にこれに直耕概念を結合する事で野生動物と家畜の区別、野生植物と栽培植物といった区分を進めた。しかし区分はしたが運氣論の制約から、生物進化論の発想はできず、穀物の精から「最初の人」の発生を推量するなどの限界も免れなかった。
- (3) 中期の「五生」論では鳥獣虫魚それぞれに棲息域の区分をするなど、貝原益軒の『大和本草』よりも具体的になっている。晩期の『法世物語巻』では人間社会の階級秩序に照応させて各動物種ごとに擬制的位階を設定しつつ、人間社会の方が獣世よりも残酷な一面を指摘した。
- (4) 動物各種について、進化論的推量はできず、それぞれの棲息域での気行から発生し、他種に形化したと論じているのは近世的制約だが、禽獣と人間の間に、進化論的契機もいくらか持ち合わせている。——直立動作と手の自由の獲得、生産労働による生命持続、家炉・用材製作など。
- (5) 中国明末清初の王船山は不均衡矛盾論の自然史観・文明史観をもち、禽獣からの野人—文明人の進化を推量できた面で昌益に優るが、治乱循環の社会発展を当然視した面で、治乱双方を否定した昌益の歴史展望観と著しく相異している。

\*\*\*\*\*

王船山の参照文献：

- 1) 船山全書編輯委員会編：船山全書 全16冊；嶽麓出版社；1998
- 2) 方 克：王船山辯証法思想研究；湖南人民出版社；1984
- 3) 田文軍・呉根友：中国辯証法史；河南人民出版社；2004
- 4) 徐儀明：王夫之的自然世界；海天出版社；2015
- 5) 筆者：王夫之と安藤昌益の社会発展論（私稿）；1988
- 6) 筆者：安藤昌益与王船山的自然理論；王守華・李彩華編：中日安藤昌益學術討論會文集『安藤昌益・現代・中国』71—91；山東人民出版社；1993

# 現代中医学系の黄帝内経脾胃病研究

## まえがき——昌益の胃脾無病論との対比から——

筆者は2022年の自著『安藤昌益の思想展開』において、安藤昌益の胃脾中核論（胃脾＝活真土と措定）が中医学・補土学派の脾胃論と共通性を持っている事を指摘した。どちらも脾胃を各臓腑に対する中核器官と位置づけているからである。そして補土学派の伝統は現代中医学に連綿と引き継がれ、“新脾胃論”として展開しているとも報じた。その際に集中的に照覧したのは

＊王道坤主編『新脾胃論』（2008；B5判・394頁；科学出版社）

であった。この書によって、『内経』・『難経』・李東垣『脾胃論』などの伝統を受け継ぎ新展開している現代中医学の進展の一端に触れることができた。そのほかにも現在までに、筆者は下記の二著も入手していたが、眼を通す余裕が無いまま現在に到っている。関心ある方々には是非伝えておきたいと思い、本誌において極めて疎略ながら紹介しようと思い立った次第である：

＊韓金榮他編『《黄帝内経》脾胃学研究』（2021；483頁；陽光出版社）

＊<sup>かく</sup>郝軍著『《内経》脾胃學術思想的論証探析』（2012；235頁；蘭州大学出版社）

昌益の真営道医学と中医学補土派の比較検討に興味ある方々へ、多少とも役に立てれば幸いである。

### （１）中医学・補土学派は脾胃病を認める

補土学派の脾胃論と昌益の胃脾論は脾胃を各臓器に対する中核器官と見なす共通性を持つ一方で、大きく相異なる面もある。それは昌益が胃脾＝土活真＝十全体・無病の存在だとして、もし胃脾が痛む事があれば、それは周囲の臓器の不調が波及した為だと把握するのに対して、中医学脾胃論では脾胃自体も周囲の各臓器と同様に発病しうる事を認める点である。脾胃を丈夫にすれば周囲の臓器の健全化にも役立つと理解する。単純に図式化すれば、

真営道医学の胃脾論＝受動的胃脾論：周囲の臓器の健全化が胃脾の十全性を保つ、

中医補土派の脾胃論＝能動的脾胃論：脾胃の健全化は周囲の臓器の健全化も促進する。

と言うように対照化できる。

以下に取り上げる二著はいずれも、脾胃病の存在を認め、その治療法を論じている。

当編集者には、胃脾が活真体だから本来的に無病、とする安藤昌益の医論には、四行論に執着したがゆえの無理が生じていると思われる。胃脾を腑臓の中核に据えたのは良しとしても、胃脾自身も発病しうると立論した方が教条化を避けられたと考えられるのだが…。

### （２）王道坤主編『新脾胃論』（2008）の概要

中国現代補土派の新脾胃論のを知る上で、当編集者は、本書を最も頻繁に参照したので、まずその紹介から始めたい。紙数の制約から、細かい紹介は出来ないので、章立て構成だけ示しておきたい。全体は上篇・中篇・下篇に三分され全15章で構成されている。

上篇 脾胃学説の形成、発展と価値

第一章 脾胃学説の形成

第二章 明清医家の脾胃学説に対する充実と発展

第三章 現代名老中医の脾胃学説の創新

第四章 脾胃学説の理論と応用価値

中篇

第五章 脾胃学説研究の思路と方法

第六章 脾胃系統臓腑の生理と病理特点

第七章 脾胃疾病臨床診断特点

第八章 脾胃疾病治法と方証論治研究

第九章 中成薬

第十章 脾胃病予防と調護要領

下篇

第十一章 口腔食管疾病臨床方証論治研究

第十二章 胃病臨床方証論治研究

第十三章 腸病臨床方証論治研究

第十四章 肝胆脾疾病臨床方証論治研究

第十五章 脾胃系統腫瘤臨床方証論治研究

このように、上篇は脾胃学説の形成発展史、中篇は現在の脾胃学理論と方証論治、下篇は方証論治の各論、といった構成になっている。

### （3）韓金榮他編『黄帝内経脾胃学研究』（2021）の概要

本書は2021年3月に出版された。韓金榮・腸葆霞・李美麗・王佳林の四者主編で、全496頁・陽光出版社の刊行。上記四氏を含めて全21名の分担執筆による成書である。

本書の表題は「《黄帝内経》脾胃学研究」だが、全九篇の表題ではすべて脾胃学が脾胃病と書かれている。目次だけでも小項目を記して10頁にのぼるので各節の紹介は省き、ここでは全九篇の表題構成だけ記しておく。

篇一 《黄帝内経》脾胃病研究——解剖篇

篇二 《黄帝内経》脾胃病研究——経絡篇

篇三 《黄帝内経》脾胃病研究——生理篇

篇四 《黄帝内経》脾胃病研究——病理篇

篇五 《黄帝内経》脾胃病研究——病因篇

篇六 《黄帝内経》脾胃病研究——病機篇

篇七 《黄帝内経》脾胃病研究——病証篇

篇八 《黄帝内経》脾胃病研究——診法篇

篇九 《黄帝内経》脾胃病研究——論治篇

各篇ともに、『素問』『靈樞』の各篇から脾胃病に関して関連事項を原文抽出・注解・評析・按語（編注）の順に記述している。現代中医学の脾胃病研究の立場から、『黄帝内経』を再編成した感がある。なお本書の執筆集団は、王道坤主編『新脾胃論』の執筆集団とは別の学派だと思われる。

### （4）郝軍著『内経脾胃學術思想的論証探析』（2012）の概要

本書は2012年3月の出版だが、上下二篇で構成され、上篇で《内経》に沿って脾胃の解剖論・生理論・病理論・《内経》以後の脾胃学伝承を論じている。下篇では具体的に脾胃系の諸病症を扱っている。章立てを以下に記しておこう。

上篇 基礎篇

第1章 《内経》脾胃の解剖構造

第2章 《内経》脾胃の生理功能

第3章 《内経》脾胃の病理变化

第4章 《内経》脾胃學術思想の后世医家への影響

下篇 病症篇

第1章 脾胃系病症

第2章 その他の病症

韓金榮他編『《黄帝内経》脾胃学研究』と違って、本書は郝軍氏の個人専著である。上篇は16頁、下篇が218頁なので、病症篇の記述が大部分を占めている。

脾胃系の病症として、胃痛・痞痛・嘔吐・噎膈・呃逆・泄瀉・便秘・咳嗽・心悸・失眠・黄疸・水腫・血証・消渴の14症が記されている。これらが脾胃に関係する病症とされるので、脾胃と周囲の各臓腑との相互関係に於いて病症を扱っていると云えよう。

## （５）現代中国の新脾胃論と安藤昌益の胃脾論の落差

以上、筆者が入手した限りの現代中医学・補土派系統の新脾胃論を寸見しただけでも、その進展ぶりが鮮やかに伝わってくる。これに対して安藤昌益の真営道医学の継承は、その胃脾論も含めてまだ原典解説を漸く終えた段階であり、大きな落差を覗きざるを得ない。

二十世紀後半から昌益医学の探究に携わってきた二、三の国内民間研究グループもみな高齢化し新たな展開は難しくなったように見受けられる。若い世代の研究者による新たな興隆が望まれている。今後の昌益の真営道医学の探究は、部分的に有意な事項の発掘（産科思想・精神医学・声音医学方面などでの有意な成果の開陳）に留まらず、より全面的で具体的な進展が望まれるのではないか。同時に、真営道医学の内在欠陥の側面も、いかほどかはあることも明確化していく必要もあると思われる。昌益医学の探究はまだ端緒に就いたばかりだと、筆者は痛感している。

## 付 記

脾胃論をテーマにして現代中医学補土派の著作三点を紹介したが、昌益の医学論との比較は、もちろん脾胃論に限定されるわけではない事を、念のため付記しておきたい。

《 当編集者による中医学と真営道医学・日本漢方の比較論考 》

- 1) 中医学の脾胃論と安藤昌益の胃脾論—補土論と土真論の共通点と相違点と可能性—；  
互生共環 No.41 (2014)
- 2) 陳修園と安藤昌益の八主脈兼相論—中医学の脈状分類論と安藤昌益の臟腑矛盾論—；  
互生共環 No.42 (2014)
- 3) 現代中医学と日本漢方の脈象解析・管見—脈象波形の検知解析と数値化・標準化へ—；  
互生共環 No.43 (2014)
- 4) 中医学「声・音・楽」論と昌益の「声・音・韻」論—五音五臟相応思想と音楽療法思想の間—；  
互生共環 No.45 (2015)
- 5) 漢方医学の脾臟と現代医学の脾臟を区別する；互生共環 No.58 (2025)

# 熊・猪など野獣の市部徘徊という事態

## ——森林の結実変動と中山間生業圏の衰退——

この二、三年、特に全国の市街地での熊・猪等の野獣の徘徊が頻繁に報道されるようになった。熊の冬眠期に入っても、こうした事態が続くというのも、従来あまりなかったと思われる。

野獣の棲息数の絶対的増加はともかくとして、この背景には二つの要因があると言われている。一つは山間部の森林で野獣の食料となる木の実の類いの不足・欠損した場合、もう一つは全国的に中山間地域住民の生業圏が衰退したゆえに野獣が“新住民”？として棲息域を拡げたため、市街地に降りて徘徊しやすくなったためだという。

### (1) 熊の食料不足化－山部森林の結実変遷

日本森林学会編集「森林科学」誌No.57(2009)の特集「クマ出没の生物学」の指摘によれば、ツキノワグマの食性は季節・地域に応じて変化するという。冬眠明け直後の春季は各種草本・木本の新芽・新葉・花を食用する。初夏には多肉質の高茎草本、ササ属、桜属・木苺属の実を食べ、夏にはスズメ蜂・蟻類の卵・幼虫・<sup>さなぎ</sup>蛹等を食べる。秋はブナ科の果実が主要な食糧となる。通年的にはツキノワグマは雑食性だが、概して植物性の食性だとのこと。熊が食べた樹木果実の種類は、90種にも及ぶという。果実の結実時期と年次変動にあわせて熊の徘徊領域も変わっていくことになる。特に秋季のブナ類結実の豊凶は熊の出没に大きな影響をおよぼす。山間部森林の結実が凶作なら、クマは自ずと中山間部から平野部に降りてくることになる。

### (2) 中山間地域・里山の荒廃

『日本列島回復論』(2019；新潮選書)の著者、井上岳一氏の指摘によれば、20世紀後半の数十年間に、それまで中山間地域に生活してきた3000万人もの人々が、産業構造の変化に伴って都市部に大移動した結果が、現在の里山荒廃の状況を招いたのだという。3000万人というのはかなり大げさに感じられるが、中山間地の生業圏が荒廃・消滅して野獣の増殖と市街地徘徊へ拍車をかけたことは表裏の関係にあると思われる。中山間地域に住民が生業を営んでいれば、その生業圏自体が熊の徘徊・増殖を防ぐ役割も果たしていたのであろう。それが衰退・滅亡したことで、熊は更に平野部・市街地へと徘徊を進めることになる。特に市街地の柿の実は絶好の食料となる。更に熊には学習効果が加わって、人を見ても驚かなくなったという報道も増えてきた。

### (3) 環境省は熊の徘徊注意報体制を準備すべきでは

このように毎年、熊などの市部徘徊が増えてくると、人々の生活の安全安心が保てなくなるので、環境省は今後、本格的に全国的規模で熊などの野獣の動態観測監視の体制を整え、必要に応じて注意報を発するといった取り組みが必要になっているのではないか。気象予報と違って、特定地域での野獣個体の出没を予報する事は無理だが、野獣の棲息分布の動態、山間部森林の結実状況などを把握して、季節に合わせて弘報・注意報を発する事は検討されても良いのでは、と思われる。

### 参考文献：

- ・日本森林学会編集：森林科学 No.57(2009) [特集]クマ出没の生物学；P.2-25; 27-30
- ・井上岳一：日本列島回復論；新潮選書（2019）——本誌No.55（2021）で紹介した。

この小文では、猪については論じる余裕が無かった。上記の「森林科学」誌 P.25-27 で猪についても記事があるので、関心のある方は参照されたい。

## 書材採録 ① 徳永光俊著『日本農史研究 上下』(2025; 農文協)

昨年6月、当編集者は『日本農書全集』第Ⅱ期(1993-1997)の編集を担当された徳永光俊教授から表記の二巻を恵贈いただいた。門外漢の自分にとっては実に広範多岐に亘る内容で、消化出来ない分野も多々あるが、農史研究の一環として安藤昌益論も含まれており、何とか読み続ける事ができた。

本文中で昌益の農論と自然観に関する当編集者の所論も紹介していただいたことには、まずもって冒頭で感謝申し上げたい。以下は疎略な感想文である。

### (1) 本書二巻の論述概観

まず、全二巻の章立て構成をフォローしておきたい。A5変形判で上下巻合計689頁の大作である。

**上巻は「生きもの循環」と農法」と題号が付けられ、農法を中心に全6章で構成されている。**

日本列島の農法史を辿りつつ、三つのキーワード＝「生きもの循環」「風土」「農法」を軸にして捉え直し、最後にその巨視的史的発展と展望を大きく三分し「天然農法」→「人工農法」(近代農法)→「天工農法」(今後)と取り纏めた。

第1章 根本原理としての生きもの循環

第2章 風土が響存する生きもの循環

第3章 狭義の農法＝農術における内的発達法則

第4章 変容する農術の開発・普及・定着過程

第5章 日本列島における風土農法の流れとカタチ

第6章 農術から広義・大義の風土農法へ

**下巻は「創発する風土」と農学」の題号で全10章の構成。**各地の「風土農法」に、対応した「風土農法」がある事を実証的に示すと共に、五人の先達＝加用信文・飯沼二郎・熊代幸雄・守田志郎・椎名重明の農法論を批判的に検討・継承し、今後の農法のあり方として著者の総括的提唱＝「風土農学」の内発的新展開を論じた。

第1章 欧米農学の直輸入から「日本」の発見/ 第2章 加用信文の農法論における生態学への転換

第3章 飯沼二郎の農法論における風土論の限界/ 第4章 熊代幸雄の農法論における生命論の意義

第5章 守田志郎の農法論における生活的循環論の展開/ 第6章 椎名重明の農学思想論における

「自然愛」への飛躍/ 第7章 外から日本列島の農学をとらえなおす/ 第8章 「創発する風土」を発見する旅Ⅰ/ 第9章 「創発する風土」を発見する旅Ⅱ/ 第10章 「自前の農学」としての風土農学

安藤昌益に関しては、上巻第1章の第2節で「江戸農書・安藤昌益にみる生きもの循環」で様々な江戸農書との対照で詳しく論じられた。更に下巻の最終章(第10章)で、自前の農学＝風土農学の中に昌益の農論を位置づけると共に、風土農学を貫く自然観の変遷史における昌益の自然理解の有意性を強調している。

### (2) 昌益の農論を日本農法史に初めて定位した

昌益の農論は、その一連の各著作において分散的に書かれており、専巻としての農論書があるわけではない。刊本『自然真営道』・『統道真伝』・『大序巻』・『真道哲論巻』・『真斎謾筆』などで分散的に論じられている。

例えば流域圏と地域生業論に関しては、『私制字書巻』・『統道真伝 万国巻』・『真道哲論巻』、穀物論に関しては『統道真伝 人倫巻』、果菜論に関しては『統道真伝 万国巻』、人為生態圏に関しては「刊本「真営道」巻一・巻二、水利・邑村建設に関しては『真道哲論巻』、適地耕作論に関しては『真斎謾筆 地』巻・『甘味の諸薬・自然の気行』巻、・・・と言った具合である。

著者はそれらを丹念にフォローして、自らが傾注した『日本農書全集』第Ⅱ期の編集で築き上げた夥しい江戸農書の内容と対照し、日本農法史の中に昌益の農論・自然観を初めて位置づけてくれたと感じている。

例えば、上巻第Ⅰ章の45-46頁で昌益が「米は世根なり」「稲は<sup>イネ</sup> 寿根なり」「稲は、<sup>イネ</sup> 命の根なり」と論じている事に対して、それらが三河の細井宜麻、備中の河合忠蔵、摂津の小西篤好、甲斐の加藤直秀、飛騨の大坪二市の農書などに共通に見られると指摘しているのには感服させられた。当編集者はこれまで、昌益のこれらの記述は単なる語呂合わせのこじつけだと思い込んでいたので、赤面した次第である。

何人かの農史農法研究者の方々が、これまでに昌益の農論を短くも採り上げた事例を当編集者も知っているが、本書ほどに詳しく採り上げ、農論だけでなく自然観も含めて高く評価した先例は無いと云える。昌益の農論が日本農法史に定位されたとなると、これに応じて今後は各著作に分散的に書かれた昌益の農論を取り纏めた“昌益の農論集成”とでも題した刊行物を、昌益研究者の側で制作できれば、と思わずにはいられない。しかしこの課題はもはや、当編集者のような古参の手によってではなく、探究心の旺盛な若い研究者に託する方がいいと思われる。

### (3) 本書からの諸教訓

最後に、本書を読んで大いに教訓になった事項を三点ほど触れておきたい。

第一に、本書上巻の表題が示しているとおり、著者は「生きものの循環」の中に農業を位置づけている。生物多様性と生態循環の中に農業を位置づけることで、これからの農法は「人工農法」本位ではなく「天工農法」として展開されるべきという主張に共感を覚えずにはいられない。

第二に、農法農史研究は関連する様々な科学分野に亘って、総合科学的識見を持って行われるのが望ましいのだと感じさせられた。著者が自然界の対称性の破れ—化学進化—生物進化の包括的視野を持ち、農作物環境に天体的要因まで含めて論及している事にも感銘を受けた。このような広い学問観を持っておられたが故に、当編集者の安藤昌益論にも関心を寄せていただけたものと推測している。

第三に、農学農法史の研究者は学术界の書学知だけでなく、現場の篤農家の実際知を重視し、人間的交流も大切にする大衆性を持った存在だと観じた。この点は物理や工学の研究者が研究棟・実験棟に籠もって日常を送る様態とは随分と違うものだと思感する。——昌益の直耕知論、二宮尊徳の実際知論とまさに通じ合っているということか。

\*\*\*\*\*

(追記) 何とか一通り読み終えたが、本書は農法農史の研究家向きの本格的な図書で、門外漢の筆者にはかなり立ち入った論述に感じられた。同じ著者による前著『日本農法の心土』(2019; 農文協)を以前読んでおいたのが、理解に大いに役立った。

本書上下巻はなにぶん大冊である上に、著者の半世紀に亘る研究史の総集版の様相も呈している。なので、今後出来れば一般向けに、平易な要約普及版を農文協の「人間選書」の類いか、出版各社の「新書版」の形態で作成・出版していただければ、一層広範な人々が関心を寄せてくれるのでは、と思われる。



## 書材採録 ② 安岡健一著『戦後史1945-2025』（2025；中公新書）

＊本書は農学系出身でロスジェネ世代の著者による戦後史

戦後史を扱った著書はいくつもあるが、本書の著者が通常の文系歴史学者ではなく、農学研究科出身者であることに、まず注目した。その故か、本書では著者の史観が唯物史観や歴史修正主義史観とはひとまず距離を置いた、独特の規準＝帝国と植民地、都市と農村、家族とジェンダーの三つの観点を規準にして記述されている。また1979年生まれで46歳の、いわゆるロスジェネ世代の人であることにも注目した。ロスジェネ世代については、著者自身が次のように紹介している。

「若者の貧困が注目されるようになり、親の世代より貧しくなる戦後初めての世代として、『朝日新聞』は2007年元日からの特集で、当時25～35歳にあたる約2000万人を「ロストジェネレーション」と命名した。その後、「ロスジェネ」という略称で広がっていく。」（本書270頁）

自身もこの世代であることを客観視しつつ、戦後史の流れを淡淡と記述を進めている。

＊戦後史の過程を五期に区分して復興－成長－盛衰を辿る

著者は戦後日本の歴史を五期に区分してその変遷を「パブリック・ヒストリー」として、つまりは民衆史に重きを置いた捉え方で辿っている。

第一期（1945－1960）は廃墟からの復興期、第二期（1960－1972）は高度成長と国民統合期、第三期（1972－1989）は先進国化と国際化の時期、第四期（1989－2008）はグローバル化と平和主義の相剋期、そして第五期（2008－現在）は世界的動揺と新たな統合期、と区分し、この順に全五章を立てて戦後日本史を世界史との関係に於いて辿った。この区分は、第一期から第三期までは大方のこれまでの捉え方と同じが、第四期と第五期の区切りを2008年のリーマンショック（米国大手投資銀行リーマン・ブラザーズの経営破綻）に置いているのは、ここだけ日本の戦後史を米国－世界史の推移で区分したことになり、議論が分かれるかと思う。日本の国内を中心に捉える限りでは、現在の状況は20世紀末から同じ傾向で続いており、“失われた30年”といった捉え方の経済学者なども一方にいる。

しかし全体としては、記述は事実経過に即して淡淡と分かり易く書かれていると、当編集者には感じられた。

＊近未来に向けての、著者の志向

以上の五章で戦後史を辿ったあと、著者は最後に総括的に「おわりに——帝国の歴史を乗り越えて」という短文を付けて結んだ。その中から、著者自身の言葉を抜き書きしておこうと思う。

「戦争の「教訓」は、敗戦と同時に自動的に得られたわけではない。時の流れのなかで、日本社会の内外にわたる様々な対立や連帯を通じて輪郭を整えてきた。（中略）平和な社会を実現するため、次世代が、自らの選択として戦争と戦後に関わる責任を引き受けていくことは、これからも一つの選択肢としてあり得る。各人が何を重んじるかの出発点は異なることを前提とし、民主主義こそがその調整を果たすうえで重要であることを共有していきたい。」（本書342頁）

「戦後史をたどると、歴史の変化は誰の思い通りにもなっていないと思える。社会は誰の思い通りにもならない。だからこそ、それぞれが何をめざすのか、対話していく事に意義がある。」

（本書343頁）

「パブリック・ヒストリーという歴史への取り組み方が広がっている。これまで専門家が独占してきた歴史を調べ書くという営みを、非専門家とともに取り組むものへと開いていく動向・・・戦後日本史は、こうした取り組みの格好の対象になるだろう。」

（本書345頁）

## 編集後記

★ また一年ぶりに今号の発行となった。20世紀半ばから来た、古参の昌益研究家による通信誌は今では本誌と、石渡博明氏の主宰による安藤昌益の会の『直耕』誌の二つくらいしか生き残っていないようだ。昌益研究の界隈も2020-2023年のコロナウイルス禍の頃を境にして、一挙に新陳代謝が始まったように感じられる。昌益関連のHPを開設していたいくつかのグループもいつのまにか消滅。

一方で、オンライン討論形態での、新たな動き（山内明美さん(宮城教育大) 主宰の昌益勉強会）も始まったようで、もう古参の研究家の用もほぼ尽きたと感じつつ、それでも何か役立つところがあればと思い今号の編集を終えた。

★ 巻頭言で21世紀の最初の四半世紀(2001-2025)の総括を短文で提起した。2025年は敗戦後80年の節目として、戦後史の回顧と総括が各方面にわたって試みられたが、同時に今世紀25年間の総括も必要だと思われる。この25年間で新保守主義に翻弄され、階級格差拡大・GDP低下＝国家の斜陽化・総人口減少への遷移・二度にわたる大震災・・・等々、日本社会と国家が傷だらけで下り坂に入った事の直視と建て直しの議論が必要だと思われる。

★ 今号では昌益の通横逆運氣論による気化形化論の、生物進化思想との異同について論及した。当初は漢字文化圏における、中国先秦期からの生物進化に関連する思想史の中での昌益の生物論の位置づけ、という発想を持っていたが大風呂敷の拡散化を恐れて断念した。僅かに明末清初の王船山の自然史観・人類史観を比較材料に取り上げるに留め置いた。王船山と昌益の比較思想論は、当編集者にとって1992年の日中安藤昌益共同討論会（中国・山東大学）での発表以来の重要テーマだが、せっかく船山全書・全16巻を所持していながら、自分の怠惰のゆえに大した展開も出来なかったと反省している。——この全書も今年中に古書業者に引き取ってもらう予定。

★ 中医学補土派の脾胃論と昌益の胃脾論が、伝統的な陰陽五行論と進退四行論の基本的違いがありながらも、脾胃を臓器の中核に位置づけ重視する共通項を持つ事を当編集者は以前から重視してきた。現在の中国では、補土派の医家にも色々と潮流があり、それぞれ“新脾胃学”としての展開を見せているようだ。門外漢なので実状の詳細は分からないが両者を対比してみて、改めて中医学の連綿とした内在的発展の一端を見る思いがする。

昌益の真営道医学にも内在的展開は期待できないのだろうか？

★ 年度末の迫った2月の寒中に、衆議院議員の総選挙が行われることになった。内閣支持率の高いうちに奇襲的に選挙を実施して安定多数を狙う意図は、あまりにも姑息に思える。高市首相の不用意な「台湾有事」云々の一言が中国を怒らせ、政治的経済的大損害を招いている。日中友好のシンボルだったパンダの引き上げにまで波及してしまった。たとえ右翼的志向体質の首相であっても、慎重に賢明な言動をとれば、このような事態には到らなかった筈である。

★ 本誌のバックナンバーは、10年ほど前から湘南科学史懇話会を主宰する猪野修治氏のご厚意で、同会のHPに掲載していただいている。最近はこれに気付いて、Web上で照覧し引用してくれる方たちも逐次現れるようになった。猪野氏と閲覧者の方々に改めて感謝したい。（2026.01.30）